

# 丈人力のススメ

く生々と「人生九〇年」を生きる

堀内正範 著 元『知恵蔵』編集長

こんなこと

その一 「熟成への道」をたどりながら

- 一 「老人力」から「丈人力」へ
- 二 長寿を愛しむ三つの秘策

その二 「非を飾る」世相をみる

- 一 「好事門を出ず、悪事千里を行く」時代 3
- 二 三人に三様の高齢期の課題 13

その三 揺れる家族

- 一 「MY・・・」がないマイホーム
- 二 「家庭内リストラ」のコア（核）用品
- 三 暮らしの知恵を次世代に伝える

その四 優れた国産品・地産品が再登場

- 一 「MADE IN JAPAN」の時代
- 二 途上国産の百貨商品に囲まれて
- 三 優れた国産品・地産品への契機
- 四 「新・日本型マネジメント」に活路
- 五 企業は定年延長で多重構造にシフト

### その五 暮らしの和風回帰

- 一 「四季と特性」が息づく地域に暮らす
- 二 和風の暮らしを共作共演

### その六 高齢期二五年の居場所

- 一 「エイジング・イン・プレイス」を定める
- 二 世代交流のさまざまな現場
- 三 地域づくりの仲間づくり
- 四 まちの中心街を「モノと暮らしの情報源」に

### その七 一高齢者としての八面玲瓏

- 一 一住民・一市民・一国民として
- 二 一国際人として

付 三世代年表 生年別の人口（男・女）、流行語、流行歌

その二 「非を飾る」世相をみる

一 「好事門を出でず、悪事千里を行く」時代

「好事門を出でず、悪事千里を行く」時代

\*強い荒廃菌が弱い善玉菌を食う

いまやちつとも希れではない「七十古希」をつつがなくすぎて、「喜寿」を迎えようとしているのに、Tさんは喜べない。

喜べない理由はふたつ。世相としてだからすべてではないが、世の中が高齢者に関心を持たなくなったこと、とくに若者たちがオモシロクナイ話には耳を傾けなくなったこと。

少年の日に自分が蒙った戦中の惨禍や戦後の混乱。それを繰り返してほしくない不幸な体験として若い人に伝えたい。それが無力であり無益であると思うようになった。

Tさんは、若者の言動はワル乗りを越えていまや「非を飾る」域にあるという。

「非を飾る」とはどういうものなのでしょう。

「なまぬるい幸せなんか押しつけないでほしい。不幸な体験だっしてみたい」

「戦争の現場に出るなんて実感は人生の極みじゃないか」

「善意なんて何も生まない。悪意が行動のエネルギー源なんだ」

「毎日遊んでるくせして、うるさいじいさんばあさんはいらぬ」

問を置きながら、Tさんは四つの若者のことばを並べた。

一回きりの人生だから不幸な体験もしてみたいという若者に幸せであることを願うことはできない。戦争を避けて平和を望むことも、善意から話すことも、そして先人として存在することすらできない。若者の「知」は時代を先回りして待つ。そして自分の耳に逆らうような「諫をふせぐ」ために使われる。人間が隠し持つ本性が露わになって、前の時代の意思を閉ざして、時代は転移するものなのか。

Tさんの目の前のテレビ画面を、ある日の昼のニュースが流れる。二〇一三年\*月\*日。

・南海トラフ巨大地震   ・銀行暴力団融資   ・後見人財産詐取   ・有名ホテル食材偽装  
・部品回収   ・送り付け商品   ・公衆トイレ損壊   ・赤ちゃん放置   ・殺人死体遺棄   ・

これがすべて。

こんなニュースなら見ないほうがいい、とわたしたちならそうできるが、若者たちは避けるわけにいかない。若者の声に対するTさんの四つの反応は善意からの先端理解である。

「好専門を出でず、悪事千里を行く」(『北夢瑣言』)という世相。「悪玉菌」は住みやすい場を求めて、IT機器に乗って、「千里瞬時」にやってくるのである。

それを示すのが「荒廃菌」をもったことばのスクランブル。

Tさんが夕刊紙や週刊雑誌の類から拾った「荒廃菌」見出し語はページから溢れるほどある。数あるものの中から、ここでは四く五行分だけ並べてみよう。

狂気 抗争 挑発 怒号 罵声 悲惨 惨劇 醜悪 墮落 嫌悪 悪意 破壊 地獄 逆襲  
不法 非道 欺瞞 汚辱 凄絶 悪徳 横領 餓鬼 殺人鬼 修羅場 非常識 犬畜生  
羊頭狗肉 魍魎魍魎 暴く ぶっ壊す 騙す 淫ら 潰し 酷い 大嫌い スッパ抜き  
いじめ ハレンチ アホ バカクビ ウソ ワースト ハルマゲドン・・。

巷の関心が「シラジラしい善意よりドスグロい悪意にある」というので、雑誌記者たちは悪意、悲惨、狂気に満ちたニュースを追う。鬼神にでも魅入られたように競って追いかけてきた。そして話題が話題を呼んで、日夜、途切れることはない。いまや向こうからやってくる。

売れるが勝ちの週刊誌は、毎号毎号、悪逆非道な人物を探し出しては暴きつづけてきた。強い「流行性荒廃菌」に対しては、より強い免疫抗体が要る。それを体内に形成するために極悪情報を送る。「負の公益」だとしても、長いあいだ善意を信じて暮らしてきた高齢者には、もはや理解できにくい領域にある。若者たちの胸のなかを、弱い「善玉菌」を食い散らしながら、右のような「荒廃菌」がうようよ泳いでいるのである。

「金輪際、わたしは関わりませんけれど」

しかし、Tさん。ちよつと待ってください。

Tさんのいうように、高齢者はたしかに軽視され無視されていて、実人生では「仮想好況」

からはなんの恩恵も受けていません。「較差」ではなく「格差」が広がっていることにも気づいていません。しかしこの四人にひとりにも増えた高齢者の存在は、史上初めてのことでないですか。戦後、先人の労苦によって得て蓄積しておいた国の「隠し資産」はもうあまりないでしょうが、高齢者が保持している潜在力は残されています。これを發揮して新たにつくろうとしている「成長+成熟社会」は、これは新次元の事業にはなりませんか・・。

「・・もう一〇年は遅いような気がします」

と、まっ白くなり薄くなった髪を撫であげながら、Tさんは真顔になって言って黙り込む。Tさん呼び戻す方策を練り上げねばならない。これは\*で論じたい。

### 「若年化・女性化・IT化」が優先

\*時流(グローバル化)と潮流(高齢化)のはざままで

時流と潮流。アジア唯一の経済先進国として、また世界最速の高齢化先行国として、時流と潮流のふたつの課題を持ち越して世紀をまたいだ日本だったが、この一〇年余りの際立った変容といえば、時流対応の「若年化」と「女性化」と「IT化」だった。

だからパソコンとケイタイを駆使する若い孫娘は、いつしか「わたしが主役！」として振る舞うようになり、「世の中ますます粗悪になる」とグチりつづけて何もしない祖父を脇役とみる

ようになった。すぐれた高齢者であるTさんのような人も、家庭内では孫娘から軽くあしらわれているのである。

激しい時流への対応が優先するのはしかたがない。

それは身近なところでは、家庭内の日用品の「途上国産化」と、企業内の「非正規社員の増加」によって実感されている。わが国よりひと足遅れて成長期にはいったアジア途上諸国と付き合うためのいたしかたない「日本途上国化」なのである。これも高齢者は、いつか来た道として、アジアの民衆が日本と同じような豊かさを共有するための時流として納得している。

「グローバルゼーション」。前世紀末にはじまった超大国アメリカと途上諸国主導の経済の「グローバル化」によってきしみながら新世紀へと舞台は回った。そして「BRICS」（ブラジル・ロシア・インド・中国、南アフリカ）をはじめとする途上諸国の台頭という経済的時流。

それに覆われてしまったから、二一世紀の国際的潮流である「高齢化」は波がしらす見えなくなってしまうている。見えないけれども新世紀の国際的課題として底流しており、日本の対応は先行国として各国に注目されているのである。

「先進国型の高齢化社会」を迎えるはずが、「途上国型の若年化社会」に出くわしたのだから、日本の高齢者は二重の災難に見舞われることになった。

政府の「高齢社会対策」の遅延が一〇年余りつづいており、対策を講じないうちに、わが国の高齢者（六五歳以上）は、三〇〇〇万人を越え、国民の四人にひとりになっている。若年者・

女性とともに、高齢者もまた日本社会で、シルバーのように渋く、プラチナのように不変に輝いていなければならない時期を迎えているのである。

## 黒字一四〇〇兆円と赤字超一〇〇〇兆円

\*家計黒字が財政赤字を補てん

安定した国を支えているのは国家財政をあずかる優れた「官僚」である。とみんなが思い、当人もそのつもりでしごとをしているからわかりやすいが、本当に支えているのは、国の骨組みを支えて安定した経営をしている企業であり、企業を支えて事業をこなして安定した暮らしを営んでいる「中堅社員」である。当人にその認識があるかどうか。それはともかく、その中堅社員から「もう我慢できない」という悲鳴に近い声があがっているのだ。

ことあるごとに「成果主義」を強いられる。正社員が減り、アルバイトと派遣社員が混在して同じ職場で同じしごとをする。しごと増なのに実質賃金の目減りがつづく。企業の生き残りのために、先輩から引き継いだ職責を黙々と支えてきた中堅層の人びとの胸の奥に、将来への不安がつゆる。経営者への疑惑がわだかまる。同僚との間でも、同業者との間でも、親和の感性が少しずつ磨り減って働かなくなるのがわかる。

安定した気分を保とうとするのだが、それとは裏腹にいらだちに近い感情が社内に強くなっ

ていく。企業の生き残りのために身を挺することを余儀なくされている中堅社員のしごとへの覇気が薄れる。退職社友には理解できないほどに、中堅社員の職場環境は悪化している。

そこで「もう我慢できない」「もう待てない」という声があちこちから挙がることになった。異次元の「金融緩和」という前払いショック政策によって、銀行や大企業や大株主は潤ったが、事業を起こして景気回復のために働くのは「中堅社員」である。そこにどれほどの前払い配分があったのか。「よしやろう」ではなく「もう我慢できない」とは何としたことか。

しごとをしないで得をしている「事半功倍」の人がいて、しごとをしても得にならない「事倍功半」の自分たちがいる。これでは不公平感が先に立つ。不安定なしごとでも最低賃金でも働かねばならない若い人がいるのに、生活保護で安定を得ている人がいる。

そのうえ高齢者はいったい何なんだ。

現役世代がムリして負担している年金を受け取りながら、ウォーキングをし、スポーツジムに通い、旅行をし、レストランで会食し、次の時代に「われ関わり知らず」として暮らしているのではないか。

年金暮らしの気軽さ。何より不公平なのは、資産として留保して手つかずという約一四〇〇兆円の「家計黒字」。親世代がため込んだ平均で約二二〇〇万円という貯蓄についてである。それをそっとしておいて「年金暮らしです」という高齢者についてである。自分の親にはそんな資産はないことを知っているし、事実そのとおり。それでもどこかに平均以上の貯蓄を抱えこ

んで引きこもりの余生を送っている高齢者がいると思っっているのはたしかである。

海外でなら時代の推移と連動しながら人も動くしカネも動く。株式や事業出資金にまわるものが、日本では現金・預金（半分を越える）のまま動いていない。

年金で暮らして、「資産の塩づけ」というのはいったい何なんだ。先輩に対する功労者としての敬意とない混ぜになって、中堅社員の胸のうちの右往左往していたらだちは、次第にふたつの方向に集約されることになった。

まずは「生活不安」への懸念。

同じ将来への不安をかかえているが、高齢者は「資産の塩づけ」をして年金で余生をおくる。一方、企業を支えて働いている現役社員の不安は、不安のまま放っておかれている。

高齢者側の言い分は、この先どこまでかわからない長い老後生活の不安を解消するためには、底まで知れている資産を「塩づけ」といわれても抱えこんでおくしかない。

一人ひとりはずかでも、それが総体として経済活動の効率を悪くし、企業活動の手足を縛っているのではないかというのが、中堅社員側からの「高齢者資産の塩づけ論」である。

ただし国の財政担当の現役官僚の理解は少し違う。超一〇〇〇兆円といわれる「高齢者資産」は一〇〇〇兆円を越えてしまった財政赤字を補てんするための黒字財源としては動かないほうがいい。いずれ二〇年もすれば一過性のもので、相続税とともに動いて解消されることになる。声には出さないが、それは自分たち世代の高齢期の暫定財源となっている。個人の中堅

社員にはわからないが、国を支える財務官僚のひそかな戦略としての理解である。

もとはといえば、この一〇年余り「安心して暮らせる高齢社会」に対する国の構想が欠けていたからだ。本稿は見定めてきたが、「高齢社会のグランドデザイン」が掲げられていれば、この間に出資・出費すべきものであったのだが、国の構想がないゆえに活用する機会を失ってきた貯蓄なのである。だから「使うべき時と使うべき所に使えなかった資産」として、老後不安の支えとして積み重なってきた。それは高齢者なら実感として理解がいくことなのである。

高齢者側の言い分は、企業内では「グローバル化」対応といって、若手にしごとを譲らせて脇役を余儀なくさせておいて、定年後には老後資金をねらうのか。現役は自分たちの力でやりぬいてくれないと困るではないか、となる。

### 簡単に移譲できない「高齢者資産」

＊世代間に亀裂がひろがる

中産社員の側からはもうひとつ、「高齢者資産」移譲の要請が力を増すことになる。使わない高齢者から使い手へ資産をトランスファー（移譲）すべきではないのかというもの。

こちらは新しい財界をつくる勢いの若手オーナーたちの持論である。いくら景気回復でもがいても、いっこうに進まない要因が、高齢者層の支援の欠如にあるというもの。使わないし使

えないのなら、必要としている若手実業家に資金を動かすべきだというもの。

先ごろ個人のレベルだが、「教育資金贈与」として一五〇〇万円までの非課税措置が決まった。そのときには「愛情口座」として、若い母親たちの関心を呼んだ。高齢者がため込んだ資産を孫のために動かそうという官僚の側からの「高齢者資産」ヒツペガシ策である。

孫の学問支援のために、すでになけなしの福沢諭吉幣を精いっぱい工面している立場からは、一五〇〇万円は実感が無いし、不愉快である。そんなことでは「高齢者資産」は動かない。

ところで「引きこもり」は、高齢者だけのものではない。企業の側でも起こっている。

優れたIT青年たちが技術開発の作業の中で、使い捨てにされて社会と断絶している。若い女性もアルバイトや派遣社員なのに荷重な実務を引き受けて体調を崩し、嵩じてはうつ病に陥って外界との関係を遮断していく。どちらも繊細な感性の持ち主ほど傷ついている。みなさんの周りにも一人ふたりと居るに違いない。

この傾向は、正社員にも広がっていて、即戦力を期待されて入社したものの、適性と将来に不安をつのらせた「新入社員のニート化」が少なからずあるという。

そんな不安定状況に包囲されている中堅社員は、気づかないうちに「自己チュー」（自己中心主義）に陥ってしまう。これ以上すすむと企業の骨格が崩れてしまいかねない。

「高齢者になればわかるが、そう簡単に移譲などできるものではない」

と、後輩の苦しい立場に同情しながらも、高齢者になって年金支給にありついたらばかりの「団

塊の世代」の人びとからは、後輩の甘えへの不快感を隠さない批判があがる。

世代間に亀裂が広がる。

これ以上の亀裂が広がらないために、本稿はことば穏やかに、双方の不安解消のための提言をしているのである。中年世代に安心感を与えるためには、高齢者が資産ばかりか知識や技術を駆使して、次世代が高齢者になったときに安心して憩える場所やしくみをつくること。これは高齢者資産を減らすのではなく増やすことになる。若い世代も関心をもつような「日本型長寿社会」を達成する姿を示すこと。

「自分がその木蔭で憩うことのない木を植える」(W・リップマン)  
という後人を思う姿勢を高齢者みんなが示すことだ。

中堅社員のみなさんは、これから本稿が論じる「高齢世代によるみんなのための社会づくり」に期待して、先輩の果敢な挑戦を見守るのがいいと思う。得られる経済的な波及効果は、将来にわたって大きいし、その成果はいずれは次世代のあなた方の資産となるのだから。

## 二 三人に三様の高齢期の課題

### 「急流勇退」の引きこもり人生

\*「いさぎよい隠退」はかつて功いまは罪

先ごろアニメ映画の総帥であるスタジオジブリの宮崎駿監督が引退表明をしたが、ああいう引退のしかたを「急流勇退」という。まだしごとができる現役のうちに惜しまれて引退する。プロ野球の松井秀樹にもそういうところがみられたが、なかなかできないことなのである。

かつては敬愛する先輩のそういう「いさぎよい進退」が、後輩に感動と活動の場を与え、将来への安心感と励ましを与えてきた。企業や組織の「高齢者リストラ」が始まったころにはさらに、優れた知識、経験そして人格をもった人びとが、会社や後輩のために定年を持たずに潔く職場を去っていった。つい最近までのこと。後輩としてはだれもがそういう君子然として身を引いて「引きこもり」の人生にはいった先輩の姿を思い浮かべることができらるだろう。

「君子は進み難くして退き易し。小人はこれに反す」

という。力のある人は潔く進退するが、凡人はそうはいかない。さしたるしごとがなくとも定年まで務める。そのうえありがたいことに、年金が始まる六五歳まで定年がゴムひものように延びてつながってくれたのである。企業の業績によるのではなく福祉対策としてである。

一方で現役世代は、しごとが増えているのに減収を余儀なくされている。

そこで、アフター5の街談巷議の場では、われわれが負担している年金を受け取りながら、多くの高齢者は「われ関わり知らず」として「引きこもり」の暮らしをしているのではないか、という不満が、ビールを呑んでは吐き出される。

しかしこれも高齢者個人のせいというよりは時代の経緯のせいである。引退後の「余生」があまりにも長すぎる。人生の終末までの間の無為徒食が不公平なのである。先人を功労者として敬愛はしたいが、それは「余生」が短く、高齢者が少なく、熟練期に仕事があったころのこと。いまや高給社員はしごとなしのまま過ごして退職金とともに消えてもらっては困るのである。早期退社して退職金と年金で何もしないで長生きするのは美談でもなんでもない。会社で培った熟練能力を活かして延びた定年の間に新たなしごとをつくって、年金分くらいは稼いでから去ってほしいのである。しごとまみれの若手としては、しごとなしの二〇年を「余生」として過ごす高齢者が忌々しい。敬意なんか湧くわけがない。この引退間際の高齢社員のことについては別の章（\*）で語る論じたい。

ここでは典型的な引退事例として、六五歳をすぎし終えた三人の高齢者の三様の暮らしぶりを見ながら、それぞれの高齢期の課題のありようをみてみよう。

まずは「急流引退」をし、あと「われ関わり知らず」をよしとして「引きこもり」の人生を送るDさんの暮らしぶりから。

## 「一陽来福」型の高齢者Dさん

\*「隠退ウーピーズ」(豊かな高齢者層)として

Dさんは、背が低いし、君子然としてあたりを払うような風采ではないが、聡明さだけは疑えない広い額に細い目で、とくに笑い顔が安心感を与える温和な人である。

超一流とはいえないがだれもが知っている並一流の企業を六〇歳定年まで二年を残して早期勇退してのち、家庭人として静かに暮らしてきた。が、「古希」を迎えて急に体力の衰えを実感してから、これからは「老人」と率直に認めることにした。新聞社の調べでは七〇歳からを「お年寄り」と思う人が半数以上という。自分でもそう思う。あと残る一五年ほど、男の平均寿命である八〇歳までは一〇年だが、それを越えて余命の八五歳までの人生をあれこれ身近に楽しんで過ごせればという人生計算を立てた旧「君子的引きこもり」のひとりである。

自分でも幸せな「隠退ウーピーズ」（豊かな高齢者層）だと思っている。会社人間だったから地域に知り人はいないが、学友や同僚があちこちに在るし、それにつかず離れずに暮らす妻と娘の家族。何よりも額に汗して旬の食材を得る「自営菜園」が自慢である。

肝心の生活費はどうか。

細目は知れないが、公的・私的年金のほかに資産収入もあって、近居している娘や孫の支援、病気や不慮のできごと、車の買い換えや築二〇年を越えた住宅・設備の修繕（これがけっこう費用がかかる）、そしてふたりの葬儀費用まで含めて、「生涯準備金」（預金と国債・株式が半々）はいままでのところ崩していない。それでも小遣いは月八万円以上。以上というところに余裕がある。ありえたかもしれない他の暮らし方と比較して、いまの暮らしに不服も不安もない。

ありがたいことにデフレで目減りしつつけていた資産が、金融緩和・株高で、老後の安定した豊かな暮らしを支える安全圏という四〇〇〇万円（高齢者の一六％という）に補充をえた。住宅ローンがなく菜園ができる土地を残してくれた岳父に感謝している。

正直に言えば、健康に不安はなくてはならない。だが、昨年一一六歳で亡くなった世界一の長寿男性であった木村次郎右衛門さんが、郵便局員をつとめて退職した後は九〇歳まで農業をして長寿だったことから、「農作業ができる間は」と安心している。

平均余命は、七〇歳の男性なら一五・一なので八五歳、同年齢の妻は一九・五なので八九歳。お互いに健康に留意しているからそれより長く、さらに男性の自分は八五歳の余命五・九を加えて九一歳、妻は五・八を加えて九五歳まで行ければと思っている。「自分はムリかもしれないが、同い年の妻の方はクリアできる」と予想している。いっしょに終末という希望は持っていない。申し訳ないが、ほどほどの期間は妻の介護に期待している。

岳父同様に住居と敷地のほかは資産を残すつもりはない。だから囲碁、釣り、ゴルフなど多彩な趣味を楽しみ、旅行でも観劇でも食事でも会合でも、学友や同僚から声がかかって可能なかぎり積極的に参加し、浪費もする。

同窓会の友人たちの名簿を見ると、死去がちらほら、半数近くに有訴の記載がある。だれその認知症や医療・介護の話を目にすると、ドック検査による健康状態も良好な自分が、めぐまれたひとりに思える。

日本経済に関しては、下降へむかう時期にあると感じているが、Dさんは「われ関わり知らず」と固く決めている。だから後輩が知恵を借りにやってくるのにも、「いまさら会社のために、わたしまで引き出すのはやめてくれよ」と、冗談としてではなくいつて態度を崩さない。

後輩からしごとに関する声がかからなくなり、七〇歳を過ぎて、みずからも体力の衰えを実感する日はさみしい。思わぬ知人の訃報に接すると、テレビも見ず、新聞も読まず、終日、気分が晴れないこともある。

独居を愉しむ「君子的引きこもり」の境地にはなお遠いことは感じている。

「ウーピーズ」（豊かな高齢者層）と自得したところで、父祖伝来の土地を切り売りして億単位の資産を得て安全圏にいる都市近郊の「金満農家」とは違う。「一園農家」にすぎないから、経済のデフレからの脱却によって頼みの資産が少しでも確保されるのは個人的に歓迎である。

Dさんは明日もまたいい日であるようにと日また一日をていねいに迎えて過ごす。「一陽来復型」の高齢者。だが、御用学者と財務官僚がさまざまな手法で高齢者の資産を切り崩す政策を取り始めたのが気に入くない。官僚のそんなやり口には、不満顔が似合わないDさんも「後人としてあるまじき行為！」として不満を隠さない。

といって、「引きこもり」に徹した生き方を変えるつもりはなく、思いのほか早々とやってきた「高齢じり貧人生」とつきあう覚悟だけは固めている。

せめてDさんくらいは生涯を安穩に過ごしてほしいのだが、このままの状況で推移するとす

るとすれば、自分は安全圏と考えている人が生涯を安穩に過ごしかれるかどうか。ましてや「現役六五年」をすごし終えて、平均平凡をよしとして過ごしてきた高齢者が、将来も日々平安であるとはとてもいえない。

### 「先憂後楽」型の高齢者Iさん

\*「ほどほどの赤字人生」が男の美学

Iさんは、このままだとかなりきびしい高齢期を送らざるをえないことになる。父親の後を継いで中小企業の経営者になった「生涯現役の跡継ぎ二世」である。二〇年ほど前、平成になってすぐに四〇歳代なかばで二代目経営者となった。だから「定年」という区切りはない。

父親が元気だった高度成長・繁栄期といわれた時期もやたら忙しかっただけ。とりわけ家が豊かになったわけではなかった。周囲の人びとが世間並みに暮らせるようにと、父親がひたすら心を砕いているのを見てきた。

父親は経営者として教育（学歴）がなかったことを生涯の負い目と感じていたから、

「おまえは大学を出にやいかん」

と口癖にいつて、家業の手伝いを強はず、子どもが高等教育を受けて意気揚々とした人生を送ることに期待しつづけた。晩年には「親孝行進学」で大学を出た息子が期待していたほどの

人生を歩んでいないことを知ることとなったが。

「MADE IN JAPAN」の技術を尽くした質の良い日本製品。それを底辺でささえてきた実直な父親と労苦をともにする社員に囲まれて育ち、いま二代目として跡目を継いでいる。見回せば、わが国の戦後の復興期からいわゆる高度成長期（一九五五〜七三年）のころに設立された中小企業では、Iさんのような跡継ぎ二世は決して少なくないはず。

同じような経緯をもつ機械製造系列の子会社（親会社ではない。それでも海外進出して元気）から下請け品を求められれば、資金繰りをして設備投資を重ねて製品を納めてきた。見方によっては重ねてきた設備投資の借入金を返済するために働いてきたともいえる。

そして迎えた世紀末の「列島総不況」。堺屋太一さんの目配りによる命名で、Iさんのような小さな事業所も見落とすことなく網羅している。

その後、一〇年余り。人を減らしながら景気回復を待ちつづけてきたが、下請け（孫請け）に徹して生涯現役で亡くなった父親には申し訳ないが、ここ五年ほどの経緯からみて、もはや自力再生の手立てはないところに来た。かつてはそれほどの重さに思えなかった一〇〇〇万単位の借入金を返済する余力が出ない。負担が年々重くなる。「生涯現役の跡継ぎ二世」のIさんが引き継いだ父親のもうひとつの遺産である草野球リーグ名門チーム「I」も、若者が減って紅白戦が成り立たなくなった。

「男というものは、きちんと仕事をすれば、どこで何をしていても、ほどほどの赤字ぐらしを

するものだ」

というのが、父親がよく口にし、自分も受け継いだIさんの負け惜しみ半分の人生哲学である。周辺の人より先に豊かになるというのが父親の「先憂後楽」の考え方である。親父はそれで満足して、働きづめで亡くなった。

製造ノウハウを持つ親会社は生き残るために、まずは主要なパーツ以外は中国や東南アジアの途上国に生産拠点をシフトした。ついには製品化までとなれば、子会社まではともかく孫請けは回復どころではない。「ほどほどの赤字人生」ともいってられない。朝起きるたびに借金の重みが増し、倒産の日が刻々と近づいてくるのを感じている。

独自のしごとにメドがたたず、下がりつづけた担保資産との見合いの末に、遠からず不良債権の処理対象として銀行から見放されるだろうが、こちらの意欲が萎えるまでは、会社と社員と家族を守るつもり。金融緩和で潤った銀行は、いまは二の足を踏んでいるが、それほど長い猶予期間があるとも思えない。

さしたるぜいたくもせず、父と同じ「先憂後楽」の心意気を貫いて、同じ境遇の「二世の星」（父の口ぐせ）たちを見上げながら、自分だけは沈没船の船長よろしく地獄へでもどこへでもゆくつもり。父の時代にゼロから始まって二代目の自分の時代にゼロに終わる会社人生を、Iさんは納得している。それはそれで昭和時代の一隅を生きた二代の終始のつけ方として。

惜しいかな、Iさん。

あなたは「先憂後楽」に徹したゆえに、「高齢社会」を多彩にし豊かにする「高齢化用品」のユーザーでありメーカーであるという点でもまた後楽の人、ゼロの人なのである。

「Iさんの会社が蓄積した技術力は、高齢社会が必要とする新製品には活かさないのですか」「孫請けだったところではむずかしいですね」

返答は明快である。高齢者の暮らしを豊かにする日用品のために技術を活かして、自力製品で活路を開くことができないものだろうか。そういう成功事例をあちこちで聞くが。

Iさんが父上以来の下請けの現場で、良質な製品の製造に努めて自得した製品化の完璧主義を崩すことなく、なんとかしてお仲間と知恵を出し合って、先頭に立って日本企業の道を切り開いてほしいものだ。平成の三代目に「先憂後楽」の心意気を引き継げるような。

中小企業の熟練技術を駆使した「高齢化優良日用品」MADE IN JAPANの時期がきているように推察されるのである。

高齢技術者の技術と経験と意欲が「高齢化製品」の製造に活かされる。それなくして内需で湧くような新たな経済活力は生まれないからである。

## 「戦々兢兢」型の高齢者Yさん

\*「貯蓄ゼロの日」へのカウント・ダウン

給与所得者は、二〇一三年四月からの「改正高年齢者雇用安定法」の施行により、定年が六五歳まで延びた。とはいえ経営トップはそのための新規起業には動かない。リスクを負わないためだ。だから退職を前にした高齢社員は、新たな事業を考えることもなく、業務替えになったり、収入減を余儀なくされながら「定年待ちの日々」を送ることになる。

多くのサラリーマンは、なんとか定年まで勤めて、行く末が不安な程度の退職金と年金を合わせ計算しながら、家族とどう暮らすかに思い悩むことになる。

改正安定法にかからずに定年退職したYさんは、技術島ひとすじに四〇年を会社勤めですごした。転職など考えたこともなかったし、退職後も前職をいかして仕事があればと願っているが、この高齢者リストラ時代。「ハローワーク」を覗いて登録はしてきたが、該当するしごとはない。失業率には計算されない潜在的求職者を思えば、失業率5%以下など信じられない。

Yさんは、少ない退職金から、住民税（これが大きい）を支払って急に重量感を失った貯蓄から、さっそく定期的収入が減った分への「貯蓄取り崩し」がはじまった。ほとんど病氣らしい病氣はせず健康だったから、給料天引きの健康保険料の負担は感じなかったが、年金からの健康保険料の支払いは大きい。

先行きの不安はすでに身边に渦を巻いている。

まずは財政負担を軽減するための「公的年金」のカット。現実味を帯びてきた「消費税増税」。長年つれそつてきた妻の持病といつわが身に降りかかるかしのれない「医療費」の自己負担。今

回は金融緩和で回避されたが、企業業績の不振による「企業年金」の減額。あと三年つづく住宅ローン。そしていつまでも独立できない子どもへの支援出費……。実は「ペイオフ」（預金の限度内払い戻し。一〇〇〇万円）に届かないほどの預金額だから、長生きすればいつかは必ず訪れるにちがいない「貯蓄ゼロの日」への不安。

「貯蓄ゼロの日」へのカウント・ダウン。

それはすでに始まっているのだ。「薄氷を履む」ような日々がこれから長く続くことになる。Yさんは多数派である「戦々競々型」の高齢者のひとりである。

退職したあとYさんは、旅行や観劇、書籍・雑誌の購入、外食などを減らして「選択的支出の削減」に努めている。それでも生活用品の値上げや日常経費、医療費や税負担とくに際立つ健康保険料など「基礎的支出」が確実に増えることから、将来の家計の先行きはとめどなくきびしい。だから技術は活かせなくとも赤字を埋めるしごとをしたい。

「一私企業人でしたし、さして優れたことはしてこなかったかもしれないけれど、必死で働いてきたつもりで自分までが、高齢者になって見捨てられることはないでしょう」

とYさんは国の将来と施策を楽観的に信じている。

長生きすればいつかまたわが家に「スイトン時代」がやってくるかもしれないが、それでも平和なら生きられるだろうとYさんは思っている。

通信機器の優れた技術労働者であり、つい最近まで会社の主力製品になっていた機器の共同

発案者。といってYさんは、一社員が発明対価（成果主義）を求めるのは違うと思ってきた。

「将来への希望はしごと現場の活力にある」と技術者であった経験からYさんは確信している。自分は細身だったのでヘルメットは似合わなかったが、NHKの人気シリーズ「プロジェクトX・挑戦者たち」で、仲間と工夫を重ねて事業に貢献した人びと、いかにもヘルメット姿が似合いそうな人びとの姿をみ、話を聞くのが楽しみだった。成果を自分のものとせず、みんなの協力の結果だという技術者がこの国を支えているという信念に今も変わりはない。番組はその後、個人の技能プロフェッショナルに転じた。

番組が終了してずいぶん経つ。というのに、Yさんの胸の奥に刻まれたように、気がつくといまも、中島みゆきが歌ったテーマ曲の一節、

「つばめよ、地上の星はいま何処にあるのだろう」

が体の中を繰り返し流れている。仲間との苦闘のあとを思いながら、溢れる涙をじっとこらえていた技術者たちの顔・顔・顔はいまも忘れられない。